



秋田県横手市内にある本多正純の墓碑。碑の周囲が手入れされている

宇都宮市街地をつくった正純



本多正純は徳川家康の側近として重要な役割を果たしました。家康が三男の秀忠に將軍職を譲り、駿府城に隠居した時には、共に現地に赴き、依然として強い影響力を持っていた家康の知恵袋として仕えました。このころ下野小山藩の大名として取り立てられています。また、大坂冬の陣の際には、大坂城内掘り立ての策を家康に進言したと言われています。

家康の死後、秀忠の側近となり、宇都宮藩15万5千石に増加されます。しかし、次第に秀忠周辺に疎まれるようになって改易されました。最終的には配流となって佐竹藩初代藩主佐竹義宣に預けられ、支城横手下(現在の秋田県横手市)でその



前野中央が「本多上野介正純公を学ぶ市民の会」の佐川君子副会長、前野心が幹事で、前野市工芸会副会長の佐藤靖子、事務局をつとめる横手市地域振興局の佐田浩一課長(前列左)、岡高樹第一主査(前列右)、本郷美佳主任



本多正純が結ぶ市民交流

歴史を学んでまちづくりを生かそう

第28代宇都宮藩主本多上野介正純は、現在ある宇都宮市街地の基礎を築きました。地元でその人物像はあまり知られていませんが、実は今、地域間の交流を取り持つ大きな役割を果たしているのです。藩主をつとめた宇都宮市と、生涯を終えた秋田県横手市との間で続く市民同士のふれ合いを紹介します。

横手市民が城の復元に協力



生涯を閉じました。改易の理由は幕府に無断で城を改修したこと、根拠同心を処刑したことなどがあげられます。今日に伝えられる將軍秀忠を暗殺しようとした「釣り天井伝説」は、のちに講談などで広まった創作です。正純が宇都宮藩主だった期間は3年ほど。決して長くはありませんが、この間に宇都宮城の大改修と城下町の町割りを行いました。さらに不動前から宇都宮城の西側を通る奥州街道を新たに整備し、現在ある宇都宮の基盤をつくりました。二荒山神社前の大通りも、小

山を開削してつくられたものです。正純の居城だった宇都宮城は、市民が募金運動を繰り広げるなどして平成19年に復元が実現しました。その中心になったのは、当所もメンバーに名を連ねる「よみがえれ!宇都宮城」市民の会(須賀英之会長)です。この運動を伝え聞いた秋田県横手市の「本多上野介正純公を学ぶ」市民の会(以下、「正純公を学ぶ」市民の会)(多賀兼敏雄会長)の会員が、寄付金を寄せてくれたのが両市の本格的な市民交流のきっかけとなりました。正純の身柄を預かった佐竹義宣は、名君の誉れ高く、現在も横手市民に慕われて

活発に続く地域間の相互訪問



た本多氏の生き方を再認識することにもなりました」と振り返ります。名君義宣が「目置いたのだから、それなりの人物だけに違いないと感じたのです。

います。実は正純は義宣を常陸から秋田へと転封した張本人でした。幽けられてもやむを得ない立場でしたが、幽閉しつつも、義宣は正純を手厚く保護しました。「正純公を学ぶ」市民の会」を立ち上げたメンバーの一人で、副会長をつとめる佐川君子さんは元学校の先生。在職中にアメリカで研修した際、郷土のことを聞かれ、答えられずに恥ずかしい思いをしたのが、歴史に興味を持ったきっかけだったと言います。「勉強していくうちに佐竹藩主の生き方に感銘を受け、その中で横手に流され

佐川さんは平成16年に正純を追悼する茶会を開き、翌年、「正純公を学ぶ」市民の会」を発足させました。会長の多賀兼敏雄さんは会社経営者で横手商工会議所の常議員。また、昨年まで横手商工会議所の事務局長だった佐藤隆さんも会の幹事をつとめています。

佐藤さんは「私たちは経済人の立場から、また佐川先生たちは研究者の立場から、お互いに力を合わせて取り組んでいます。最もありがたいのは、事務局を横手市役所が引き受けてくれていることです。横手市横手地域局地域振興課の高橋新一主査は「市民が中心に盛り立てているので、それをサポートするのが私たちの役割です。ふるさとの歴史文化をきちんと後世に継承していきたい」と話してくれました。

横手市役所内には宇都宮大学卒業生など、宇都宮に住んだ経験者もかなりいて、会の活動に大きな力になっているとも聞きました。「学ぶ楽しさを軸に、研究者、経済人、行政が一体となって活動が続いています。人と人とのつながりが歴史を深めていくのではないのでしょうか」と佐川さん。歴史を通してのまちおこしも目指しています。宇都宮城復元の募金以来、相互の交流



石碑の近くには「よみがえれ!宇都宮城」市民の会」が植樹したウメモドキが植えられている



「本多上野介正純公を学ぶ市民の会」の多賀兼敏雄会長

は今でも続いています。数年前には「よみがえれ!宇都宮城」市民の会」のメンバーが横手市を訪れ、正純の墓の近くに紅白のウメモドキを植樹をしました。正純が横手で詠んだと伝えられる「陽だまりを恋しと想ううめもとき日陰の紅を見る人もなく」の歌にちなんだものです。また、宇都宮城址まつりには、横手の名物「横手やきそば」のチームが来訪して、宇都宮市民に本場の味を振る舞いました。

墓碑移設に宇都宮市民が協力



配流された正純は墓をつくることを許されず、当時の横手区裁判所近くに土間頭が残るだけでした。これを哀れに思った

裁判所職員たちが、明治42年、自費で正純ゆかりの上野台の地に墓を建立しました。これが現在の墓碑ですが、その後、墓碑前に4メートルの記念碑がつけられたために、本来の墓碑が陰に隠れてしまいました。これでは当初の建立者の意図が損なわれるということで、墓碑を移設して整備し直すということになりました。墓碑移設の募金活動を行う中で、今度のは「よみがえれ!宇都宮城」市民の会」が募金に協力。先日6月17日(金)に横手から関係者が訪れ、目録の贈呈が行われました。移設は9月中に完了する予定で、供養の茶会が開かれることになっており、宇都宮からも市民が訪ねることになっています。

郷土を愛する心は、その歴史を知るところから芽生えます。会報「天地人」では、本特集を皮切りに今後4回にわたって宇都宮の成り立ちを紹介していきます。筆者は郷土史研究の第一人者である堀静夫先生です。



石碑の付近には本多正純の墓跡を案内する表示がある